

「共生平和への一歩」

沖縄平和賞シンプオ受賞者、生徒議論

沖縄平和賞の歴代受賞団
体の代表者と県内中高生に



よるシンプオジウムが13日、那覇市の琉球放送であった。「アジア・太平洋の平和交流地域を目指して」をテーマに、海外で支援実績がある受賞団体が活動を紹介し、中高生もそれぞれ平和の実現に向けて意見を発表。共生の意識を広げ、平和を目指す方向性を提起した。

.....
沖縄平和賞受賞者らと中高生が平和について論議したシンプオジウム13日、那覇市の琉球放送

第6回平和賞を受賞したNPO法人シャプラーニールの筒井哲朗事務局長は、40年前からスタートしたバングラデシユなどでの自立支援の取り組みを説明。その上で、「貧困や障がい者福祉など共通する問題は日本にもある。共生をテーマに市民が学び、力を結集して解決に向かうことが大事だ」と強調した。

歴代の受賞団体は「なぜ支援するのかを相手に説明できなければならぬ」「相手の文化や人のプライドを

理解、尊重しなければ支援はうまくいかない」などと実践を踏まえた意見を紹介、国際支援に取り組む際の基本姿勢についても議論が及んだ。

先島を含む6人の中高生は、学校生活を通して考えた平和のメッセージを発表した。

放送部で沖縄戦の番組を制作した那覇高校3年の大城昂子（なか）さんは、「過去の歴史や苦しみを忘れているから戦争はなくならない。歴史を知ることが平和への一歩だ」と話した。ほか生徒からは分かち合いや支えあい、「命どう宝」などのキーワードを挙げ、平和構築に向けた行動を呼び掛けた。